

新建 プラスワン +1

学び続けるつくり手のための「ベンチマーキング」マガジン



「新建ハウジングプラスワン」 新建ハウジング2014年2月28日号付録
1995年3月31日創刊 6月30日第三種郵便物認可 定価：1万2000円(本体)+税[半年]

設計施工・写真提供／総組(東京都)

トップランナー事例に学ぶ

大工集団が提案する原点回帰の家づくり

してあげたいこと重視の主観的家づくり

「母子」安心の住生活サービスを提供

展示棟核にアーキテクト×コミュニティー融合

最先端のノウハウを知る

地域工務店ができるブランディングの方法

「見学会」の種類・目的とポイントを再考

食卓を考えて設計する

消費増税直前の最終チェックリスト

生産性を下げる分業化の罟とは

ホームページ制作・活用で気を付けること

3

2014 3月号 No.647



古民家を改装した鯨組の事務所。1階が「なんてんcafe」

若手大工集団が提案する 設計・施工一貫の家づくり

「設計と施工が分離しない家づくりをやりたい」。鯨組（東京都豊島区）代表の岸本耕さんが大学在学中から抱いてきた問題意識を発端に、大工修行の世界を経て26歳で設立したのが鯨組（なまzugumi）のはじまり。現在同社の周囲には、同志が全国から集まり、住まい手、職人、地域まで巻き込んだ家づくりの再定義が起こっている。

2月に降った大雪で道に雪が残る東京・西池袋。静かな住宅街の一角に、木造建築を改装したレトロな店舗がある。店先には手で書かれたお品書きの看板と糊のきいた爽やかな暖簾。平日昼過ぎのガラス越しに見える店内は、昼食をとるお客さんで賑わう。

建物を改装したのは建築事務所・鯨組（なまzugumi）。築55年の一般的な木造2階建て住宅を改装した建物で、2階が彼らの事務所。1階のカフェレストランも2010年から同社が運営している。

故・田中棟梁に学ぶ

「職人集団でありながら、住まい手と積極的にコミュニケーションをとり、暮らしを提案できる存在でありたいという思いがある」と、大工や建築業の枠を軽々と超えた店舗開設の意図を話すのは、鯨組代表の岸本さん。

建築事務所設立のきっかけは、岸本さんの大学時代まで遡る。建築学科に入学し、当たり前のように入社。2004年に26歳で独立するまでの4年半、社寺建築や伝統的構法による住宅の新築・改修に携わり、大工仕事の基礎と、大工集団によってつくられる建築の哲学を身につけた。

岸本さんは大学3年から田中文字男氏の弟子が運営する真木工作所でアルバイトを始め、大学卒業後に入社。2004年に26歳で独立するまでの4年半、社寺建築や伝統的構法による住宅の新築・改修に携わり、大工仕事の基礎と、大工集団によってつくられる建築の哲学を身につけた。

「奇抜なデザインではなく、どこにでもあった普通の家の美しい佇まいを自分の手で取り戻したい」。独立直後は真木工作所の仕事も手伝いながら、細かい修繕でも自分で請け負える仕事をみつけてはひたすらこなす毎日を送っていた。

ケヤキ材再利用した「鯨の家」

チャンスが訪れたのは独立2年目。大学時代の同期生だったKさんご実家の新築施工を手がけることになった。

施主の要望により、偶然に埼玉県吉川市で取り壊される予定だった

鯨組の手法1

空き家を再生した「なんてんcafe」



「なんてんcafe」店内

2009年に木造2階の空き家を改装して開設した鯨組の事務所。1階は内装をみてもらえるショールームとしていたが、訪れる人にお茶やお菓子を振る舞ううちにカフェのアイデアが持ち上がり、玄関にある南天の木にちなんで「なんてんcafe」として2010年に開業。さらに常連客からの「食事したい」という要望に応え、2011年からはcafeレストランに拡充した。

店長を務めるのは広報担当の大石真理子さん。もともと事務所の隣の住人でカフェの常連客だったという。用意するメニューは「地域の素材を生かして、健康に配慮したもの」がモットー。「活動に地域を巻き込んで活性化したい」と、店でお菓子や野菜はできるだけ地元の店から調達する。大石さんが常に意識しているのは、レストランと建築のコンセプト

トを一貫すること。暮らしのハード面を鯨組が提案するとすれば、「なんてんcafe」は食を核にして暮らしのソフトを提案する場。現在は住民向けに月1回料理教室も行う。

レストランは「鯨組という組織を社会にオープンに開き、また大工である社員一人一人が顧客と積極的にコミュニケーションしていくことを宣言するためのもの」と岸本さん。これにより建築だけでなく暮らしを提案する企業という印象づけが明確になった。

またメニューや価格設定、さらには内装の素材や照明のセンスまでのコンセプトの浸透が、鯨組のブランドづくりに役立ち「よい箱をつくる企業ではなく、良い暮らしをつくる企業でありたいという意識改革にもなっている」という。

ベンチマーク
ポイント

- 1 大工集団による設計・施工一貫の家づくりを復権
- 2 手仕事を生かせる数寄屋建築、こだわりリノベーションに照準
- 3 古民家改修したカフェ、広報強化でこだわり
施主・地元にブランド発信



T邸外観。坪90万円一品ものの民家型住宅の代表例。
施主のイメージは温泉旅館のような佇まい

事例
T邸

T邸濡れ縁。雪見障子で外とのつながりを感じる



T邸リビング・ダイニング。施主思い出の庭木を縁側角柱に使用



T邸洗面と風呂。ハーフユニットに無垢内装

コスト抑えた
スタンダード住宅も開発

「カーのような工業製品を組み合わせた家づくりに満足できない住まい手が、同社をみつめて声を掛けるパターンが多い。」

「こちらからの一方的な建築はやりたくない」という岸本さんが大事にしているのは、施主との打ち合わせ。相手は数あるつくり手の中から同社を見出した意識の高い施主だから、踏み込んだやり取りも多い。その繰り返しのおかげで信頼を得ていくという。

具体的な課題や要望、ときには遊び心がディテールに変わっていく現場は「そのやり取り自体が極上のエンターテインメント。昔の旦那や棟梁はこれを楽しんでいたんだと実感した。つくり手にとってこれほどやりがいのあることはない」と岸本さん。「もちろん施主によつてどれだけ過程を楽しんでもらえるかは違う。教科書どおりの家でも、遊び心のあるディテールが一つ加わるだけで見違えるようなあたたかみが生まれる」と話す。

同社が狙うのは、設計事務所でも工務店でもない、新しい家づくりのかたち。大工集団のなかから生まれた「アートディレクター」や「プロデューサー」のような役割のリーダーが、施主と職人をつなぐ翻訳者としてプロジェクトをまとめ、普遍的な美を備えた建築



有名な若手落語家・Y氏邸。大師匠邸の解体と重なり、Yさんも思い出深い建具・家具を随所に散りばめた

事例
Y邸

Y邸和室。円窓障子で自然光が部屋に広がる



Y邸1階玄関と階段。新旧が織り成す空間



Y邸最上階。空を眺める浴室と大きなデッキを設けた

「この「鯉の家」が注目を集めたことで、住宅新築の受注が波に乗った。現在は新築を中心に住宅を年間約4棟のペースで請け負う。岸本さんを含め設計兼監督が3人、大工専任3人、大工見習い1人、監督専務1人、広報1人の計9人体制。住宅を中心に大小リフォームも請け負い、木工事は社員大工と協力業者との連携によってこなしている。」

つくり手の理想像

同社の請負額は平均坪90万円。十分な予算がありながらハウスメ

た築80年の酒屋を都内に移築。いまでは貴重になった大径ケヤキの柱・梁をぜいたくに使いまわし、現場で施主のこだわりを聞きながら、そのイメージを施工に行き届かせていく。施主のセンスに、結果自身の強みである無垢の素材感、大工の手仕事のぬくもりがうまく調和した空間が生まれた。

「自分たちのやるべき家づくりのかたちを見定めることができた記念碑的な住宅になった」と岸本さんはいふ。施主とはじめて打ち合わせをした鯉料理屋に由来する屋号「吉川の鯉」は「初心を忘れないように」と、現在でも会社の正式登記名として使い続けている。

建築事務所・鯨組



代表の岸本耕さんが大学建築学科卒業後、大工修行を経て設立。伝統的構法や数寄屋建築の経験のある大工が集まり、設計から施工まで一貫した家づくりをおこなう。住宅を中心に、数寄屋造り・民家型の住宅の新築や改修を請け負う。事務所は木造住宅を改修したもので、1階ではカフェを経営。社員9人。年間新築受注は平均4棟。

東京都豊島区 TEL 03・5986・1081
http://www.yoshikawano-namazu.com

鯨組代表 岸本 耕さん



民家型住宅T邸の上棟現場



解体現場から古材運搬



岸本さんとお施主さんの打ち合わせ



埼玉県草加市にある同社工房

今では母校の大学で講師も務める岸本さん。方向を見失った建築業の暗いムードを象徴するように、無難で安定した職業を選ぶ学生が多いように感じるといふ。「学生が夢を描けない時代。建築という職業に対する危うさや矛盾も肌で感じている」といふ。

「新しいことを挑戦する機運を盛り上げ、近い将来は、住宅建築に携わりたい学生たちに憧れのつく手像を提案したい」とする。

「既存の納まりを踏まえて顧客の要望に応えた仕様をまとめていくには現場での打ち合わせが不可欠で、我々が培ってきたスタイルを生かせる」

「若手が憧れる仕事をつくる」

そのため今後の事業は、坪100万円以上の数寄屋建築、坪90万円の一品モノの民家型の住宅、坪70万円のスタンダード住宅が柱。これら3タイプを顧客に選んでもらうかたちとし、さらにこだわりの層向けのリノベーションも引き続き展開していく。

「取れない人たちの要望に応えたい」と話す。

鯨組の手法2

フリーペーパー「鯨日和」

同社の大きな特徴は、広報担当者を持つこと。「これまで職人といえは口下手で、自分たちの仕事の魅力を伝えきれなかった。その壁を越えることで大きな飛躍につながる」という岸本さんの思いからだ。

広報担当の大石真理子さんの役割は、ホームページのコンテンツ管理と、ブログ・フェイスブック・ツイッターの配信、完成見学会や「なんてんcafe」のコンセプトに合ったイベントの企画・運営・告知。また隔月でフリーペー

パー「鯨日和」も制作する。各メディアへのニュースリリースも配信。取材も広報が一括窓口になる。

「鯨日和」は7〜8ページの冊子。毎回特集ページで引き渡し後の施主インタビューなどを通じて自社の取り組みを紹介するほか、多彩な執筆者のコラムやイベント告知も行う。冊子は外部デザイナーと連携して制作。読みものとしての質を高めることで、地元の店や施設も設置に協力してくれている。冊子はすべてホームページからも閲覧・ダウンロードできる。



フリーペーパー「鯨日和」

を生み出す。岸本さん自身が茶道を習っていることで、かつて大工出身でありながら茶道と建築の審美に精通し、財産家のために数々の名茶室を残した「仰木魯堂（おうぎろどう）」という人物を知った。新たな挑戦をする岸本さんにとって、過去の偉人との出会いに勇気づけられる日々だ。

新たな挑戦

最近では岸本さんの茶道の仲間から茶室の建築を請け負うことも。旦那普請の特徴を持つ数寄屋建築は、住居部分を含めると総工費は1億円を超える。最近はそのような茶室の受注が増えてきた。「水

鯨組の手法3

一日「仕事見学ツアー」で現場公開

「大工になる旅」を募集するサイト（「仕事旅行社HPより抜粋」）

鯨組が外部企業と協力して行っているサービスが、同社の仕事現場を1日ツアー見学形式で公開すること。さまざまな職種の見学ツアーを企画する合同会社仕事旅行社から依頼があり「大工になる旅」と題して共同で企画した。大工仕事に興味を持つ個人や企業に対し

て、設計と施工を分業しない同社特有のスタイルや建築現場、社員大工育成など「鯨組がどのような家づくりを進めているか」ということを深く伝えていくことがねらい」と、大工仕事に興味を持つ個人や企業を積極的に受け入れていく。

平垂直の木工事ではいずれ機械化の波に飲み込まれてしまう。曲線を自由に加工できる手仕事を生かせる仕事を求めて軌道に乗せていかなければいけない」とする。

提案先は高所得者層。「職人とのやりとりを楽しみ、日常生活の中にある芸術を楽しむ感覚を味わってもらいたい。茶室の空間美をしっかりと提案し、高級住宅の市場に文化的価値を根付かせたい」と話す。

今年春には岸本さん自邸の地下に茶室を新築し、シヨールム兼打ち合わせスペースをオープン。あわせて今後は、京都方面に部材の仕入れ拠点を構えて数寄屋造りの提案を拡充するなど、新たな体制を整える考えだ。

一方で、自分たちの家づくりをもっと広く届けたいと、これまで標準だった「工期半年・坪90万円」の仕様に加えて新たに「工期4か月・坪70万円」の企画住宅の開発にも挑戦。昨秋に桜設計建築集団の安井昇氏と協働し、民家型の架構や納まりを標準化しながら満足度の高い提案を凝縮して詰め込んで「桜×鯨（さくらなまず）」の家」としてブランド化した。「我々の思いに賛同してもらいながら、コストが合わなかったり、なかなか打ち合わせや現場に通う時間が